

「ジェンダー平等に向けて」

日本では古くから「男性は仕事、女性は家庭」という固定的な性別役割分担意識が根付いてきました。こうした「女/男はこうあるべき」という固定観念にとらわれず、一人ひとりの個性や能力が尊重される社会のために何ができるかを考えてみましょう。

家庭、学校、職場…それぞれの平等意識

内閣府が公表した「男女共同参画社会に関する世論調査」によると、社会全体の男女平等については 74.7%が「男性の方が優遇されている（「非常に優遇されている」と「どちらかといえば優遇されている」の合計）」と回答しています。また、次のそれぞれの分野での男女の地位について、「平等」と答えた人の割合は、「学校教育の場」で 70.4%、「自治会やPTAなどの地域活動の場」で 40.3%、「法律や制度の上」で 38.2%、「家庭生活」で 30.0%、「職場」で 25.8%、「社会通念・地域の慣習・しきたりなど」で 16.3%、「政治の場」で 9.4%¹ となりました。

	男性の方が優遇されている	平等	女性の方が優遇されている
社会全体	74.7%	16.7%	6.8%
学校教育	21.9%	70.4%	6.1%
職場	63.8%	25.8%	9.2%
家庭生活	60.7%	30.0%	9.0%

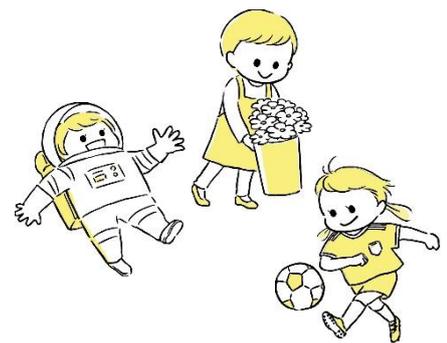
内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」（令和6年9月調査）より作成

このように、学校教育の場と職場などの学校教育以外の場で男女平等意識が異なるのはなぜでしょうか。学校では、「男女平等」が当たり前のように感じられる場面が多くあります。授業や部活動、学校行事などでは男女と一緒に活動し、同じように評価されることが一般的です。職場でも、男女の業務内容や昇任機会は平等に与えられているものの、「女性は家庭を優先すべき」という暗黙の期待や自分自身の無意識な思い込みにより、責任ある仕事や重要なプロジェクトから外れようとしたり、育児や介護のために女性だけが休暇・休業を選択するなど、キャリアを断念せざるを得ないこともあります。

しかしこの裏で、男性が抱えている「生きづらさ」についても理解する必要があります。あなたの身近な男性も「男らしさ」を求められ、「出世に野心的でなければならない」「プライベートよりも仕事を優先すべき」「つらくても弱音を吐いてはいけない」といった見えない苦しみを抱えているかもしれません。

こどもの選択肢、可能性を狭めないために

NHK 放送文化研究所の調査によると、「男の子は男らしく、女の子は女らしく育てること」に「賛成（どちらかといえば賛成を含む）」と答えたのは、父親は 63%、母親は 43%² となりました。身近な大人のジェンダー意識は、こどものジェンダー意識に強く影響します。例えば、「男の子なんだから泣くんじゃない」「女の子らしくおしとやかにしなさい」など、家族や学校の先生などから男の子らしさや女の子らしさを意識させるような言葉を聞くと、こどもは無意識のうちにそれを学習し、自分の行動や興味、進路選択を制限してしまうことがあります。私たち大人が、固定観念にとらわれず、多様な価値観を受け入れる姿勢が大切です。



家庭でジェンダー平等の意識を育むことは、こどもの未来だけでなく、社会全体の多様性を広げる一歩となりそうです。

【出典・引用・参考文献】

i 男女共同参画社会に関する世論調査（令和6年9月調査）

https://survey.gov-online.go.jp/women_empowerment/202502/r06/r06-danjo/#sub2

ii NHK 放送文化研究所「中学生・高校生の生活と意識調査」

<https://www.nhk.or.jp/bunken/yoron-isiki/tyuko/>